

# 2022年 11月13日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

## 詩編 30編 「感謝して」 高橋彰

### 30 1【賛歌。神殿奉献の歌。ダビデの詩。】

2主よ、あなたをあがめます。

あなたは敵を喜ばせることなく

わたしを引き上げてくださいました。

3わたしの神、主よ、叫び求めるわたしを

あなたは癒してくださいました。

4主よ、あなたはわたしの魂を陰府から引き上げ

墓穴に下ることを免れさせ

わたしに命を得させてくださいました。

5主の慈しみに生きる人々よ

主に賛美の歌をうたい

聖なる御名を唱え、感謝をささげよ。

6ひととき、お怒りになっても

命を得させることを御旨としてくださる。

泣きながら夜を過ごす人にも

喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。

7平穏なときには、申しました

「わたしはとこしえに揺らぐことがない」と。

8主よ、あなたが御旨によって

砦の山に立たせてくださったからです。

しかし、御顔を隠されると

わたしはたちまち恐怖に陥りました。

9主よ、わたしはあなたを呼びます。

主に憐れみを乞います。

10わたしが死んで墓に下ることに

何の益があるでしょう。

塵があなたに感謝をささげ

あなたのまことを告げ知らせるでしょうか。

11主よ、耳を傾け、憐れんでください。

主よ、わたしの助けとなってください。

12あなたはわたしの嘆きを踊りに変え

粗布を脱がせ、喜びを帯としてくださいました。

13わたしの魂があなたをほめ歌い

沈黙することのないようにしてくださいました。

わたしの神、主よ

とこしえにあなたに感謝をささげます。

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

詩編30編は「感謝の祈り」と言われる詩編です。

魂が陰府、墓穴に下るかのように思える苦難の中で、神に叫び求めて祈った詩人が、神に「引き上げ」られ「命を得」たと思えるような救いを得て、神を賛美し感謝する喜びにあふれた歌を歌います。重篤な病が奇蹟的に癒されたユダ王国のヒゼキヤ王(イザヤ38)や、詩編6編の詩などとの関連も指摘されています。またこの詩は「神殿奉献の歌」とも題されており、エズラ記6章やネヘミヤ記12章などの奉献祭との関連が考えられたり、実際に奉献祭(BCE165年)で歌われたとの記録もユダヤ教の口伝律法集「タルムード」に記されたりしています。

この詩人は「死」の危機に脅かされる苦しみの中で祈ります。人間いつかは死が訪れるとはわかっていながら、人はそれを遠くに置くようにしながら生きています。しかし、この詩人は病によって、人生途上でまだ思いもかけなかった死が突然間近に迫りました。死を「敵」と呼び、死の領域は陰府に下り、墓穴に下ることだと表現します。神と向き合える関係が断たれ(主の御顔を隠され)、一方的に神は自分に怒っているのだと感じて、幾晩も泣きながら眠れぬ夜を過ごす、不安と悲しみの場所

で、賛美もなく、感謝も、真実もない「沈黙」です。しかし、詩人はその嘆きの中から癒され、今、賛美の声を主なる神に向かってあげ、感謝をささげています。

詩人は単純に病が奇蹟的に癒されたから神を信じて感謝したと歌っているわけではありません。回復されたのは健康ではなく、神との出会いでした。元気で平穏であった時には、死も遠いものと考え、自分のいのちは「とこしえに揺らぐことがない」と自負し、自分のちからで生きていた。しかし苦難によって恐怖と涙と苦しみの中で、神を呼び求め、そこで自分のいのちが神の恵みによって与えられ、生かされているものであることに気づかされました。神の憐れみのゆえに、わたしのいのちも、その行く末もむなしなものではない。わたしのいのちは神がいつも近くにおられ、対話があり、そこに真実がある。神に希望をかけてよいものである、と気づかされます。そのとき、わたしの命はもはや恐れや嘆きの中に自力で立っているのではなく、喜びの帯を締めて神に希望をこめて委ね、生きる間も、死をも含めてわたしの命すべてを「わたしの神」と呼ぶほど親しみ深い神に信じ頼って、生きようとするのです。

※神殿奉献の祭りについて、紀元前165年、シリア王のアンティオコス・エピファネスがユダヤ人がヘレニズム(ギリシア)化を強要し、エルサレム神殿も攻撃して荒らしたことによって冒されたが、シリアの支配から奇蹟的に解放され、その神殿で礼拝が再開されたことを記念し想起して行われたことを記念して祝い祭りが続けられたことが、旧約続編のマカバイ記一4章に記されています。